

3. 底魚資源変動調査

3- (1). 底魚漁獲統計調査

志村 健

目的

沖合底魚資源の持続的利用と沖合底びき網漁業の経営安定に資するため、山陰沖における有用資源の資源動向を把握する。

方法

鳥取県の沖合底びき網漁船が所属する地区（賀露、網代、田後）の漁獲月報を集計し、漁獲の変動を把握した。

結果

地区別に魚種別漁獲量、金額の年推移を図1に示した。2011年の本県沖合底引網の地区別漁獲量、金額を集計し、図2に示した。

○賀露

1980年前後に2,000tから2,500tを漁獲していたが、その後減少し、2004年には1,430tまで落ち込んだが、ハタハタの漁獲量の増加等により、2006年は1,995tとなった。また、漁獲金額は1990年代前後が最も高く、1986年及び1991年に21億円を揚げている。しかし、その後は減少傾向にあり、2005年は10.9億円にまで減少した。

2011年の総漁獲量は1,819tで、その内訳はアカガレイ24%、ハタハタ13%、ソウハチ17%及びズワイガニ12%で、この4魚種が漁獲の約7割を占めていた。また、漁獲金額は11.1億円であったが、そのうちズワイガニが43%を占め、以下アカガレイ14%、ソウハチ12%、ハタハタ9%、となっていた。

○網代

漁獲量は1981年の2,319tをピークに減少し、1986年には1,256tまで落ち込んだが、その後は増加傾向にあり、2008年は2,138tであった。一方、漁獲金額は賀露と同様に1990年前後が高く、1991年には21.3億円を水揚げしている。しかし、その後は減少傾向にあり、2004年には12.6億円にまで減少した。

2011年の総漁獲量は1,855tで、アカガレイが31%、ズワイガニ19%、ハタハタが19%で、この3魚種が漁獲の約7割を占めていた。また、総漁獲金額は13.2億円、そのうち40%はズワイガニで以下、アカガレイ28%、ハタハタ12%となっており、他の2地区に

比べ、アカガレイの割合が高かった。

○田後

漁獲量は1990年前後が最も低く、1985年には1,254tまで落ち込んだ。その後は増加傾向にあり、2005年以降概ね、は3,000t程度の漁獲で推移して2008年は3,450tとなった。一方、金額は統計を取り始めた1975年以降増加傾向にあり、近年は、20億円程度で推移している。

2011年の総漁獲量は2,603tでその内訳はズワイガニ18%ソウハチ18%、ハタハタ10%であった。その他にアカガレイ、ヒレグロ、エビ類を漁獲しており、その他の魚種の占める割合も高く、他の2地区に比べ多様な魚種を漁獲していることが判る。また、総漁獲金額は14.7億円で、ズワイガニの割合が41%を占め、他の地区同様、非常に高い割合を占めていた。

○合計

2011年の総漁獲量は6,277tでその内訳はズワイガニ24%、ズワイガニ17%、ハタハタ14%、ソウハチ13%であった。また、総漁獲金額は38.9億円で、ズワイガニの割合が42%を占め、次いでアカガレイが16%となった。前年の総漁獲金額は38.9億円でズワイガニの漁獲金額が1.6億円減少した影響が大きい。

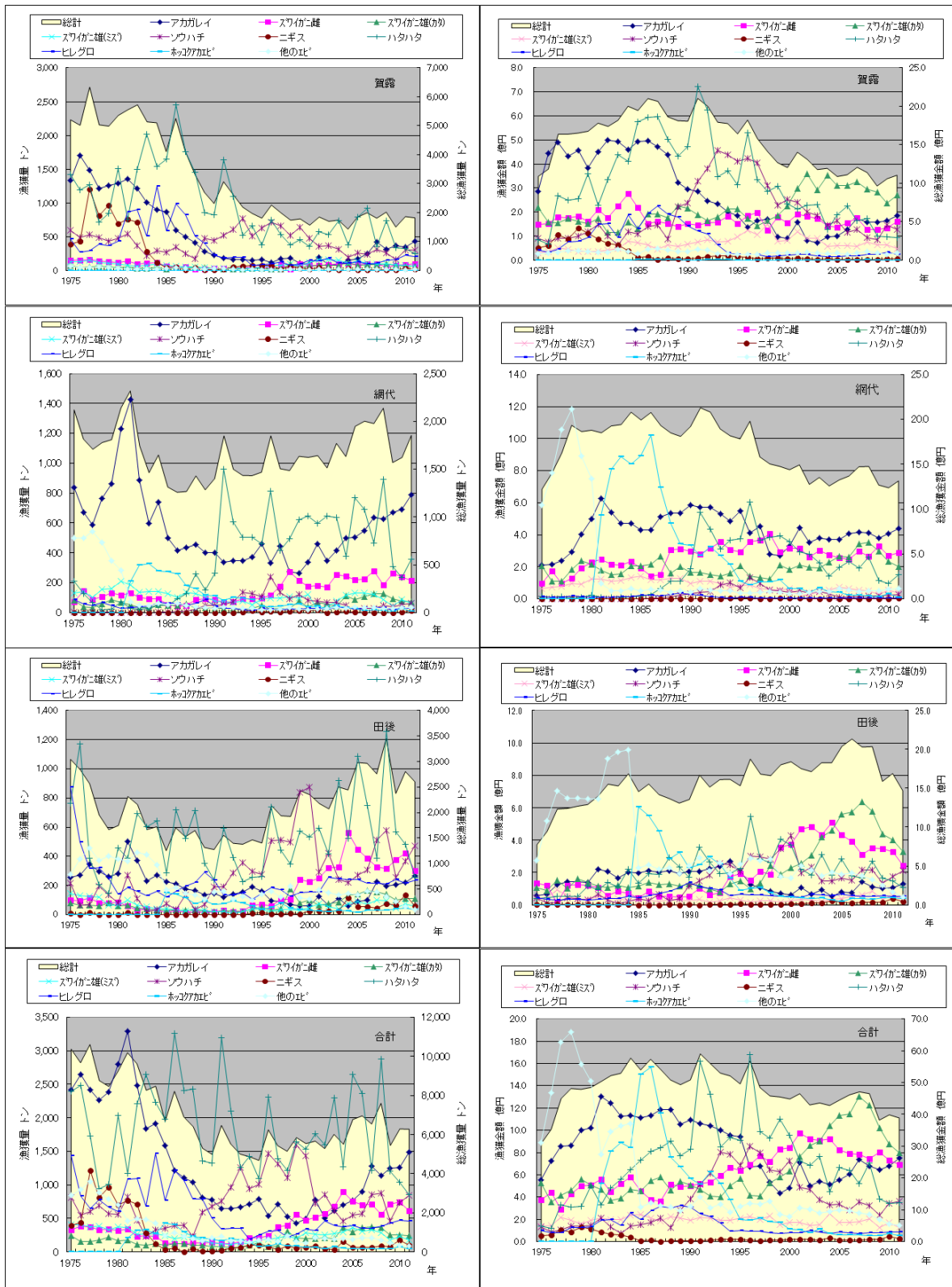


図1 地区魚種別漁獲量, 金額の年推移

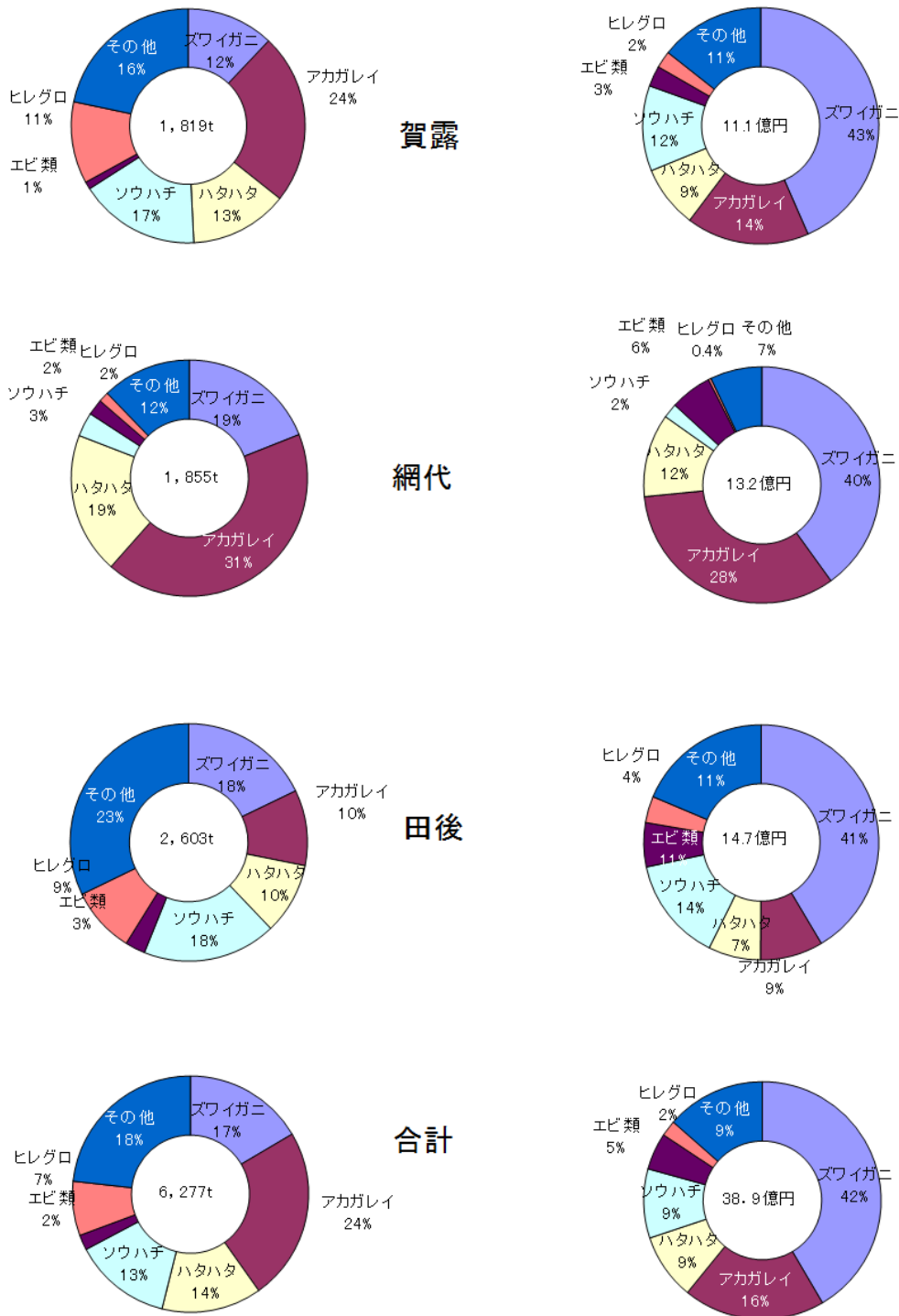


図2 地区別魚種別漁獲量,金額 (2011年)